



TAKE OFF press

TAKEO Future Frontier

【校是】質実剛健 報恩感謝

佐賀県立武雄高等学校

校長通信 NO. 11 R6. 09. 01

文責 校長 下村 昌弘

E-Mail shimomura-masahiro@education.saga.jp



学校 HP

人生に“失投なし” —正解なしの時代をどう生きるか—

「失投というものはない」と言ったのは江夏豊でした。

バッターにとってはど真ん中の打ち損じがあれば、ピッチャーにとってはコーナーに決めても外野の前にポトリということもあります。「今のは失投ですね」という言葉を時折解説者が使いますが、江夏の言葉は「最初から打たれると決まった球はない」ということを意味しているのでしょう。



<https://yakyuzuki.com/enatsuyutaka-4195>

そこには計算どおりにはいかない勝負の厳しさがうかがえます。よかれと思ってやったことも逆の結果をもたらすことがあります。勝ち負けは思うに任せぬもの。勉強もそういうところがあるのかもしれない。

そこでうまくいかなかったやるせなさをぐっと飲みこみ、次に向かうための処方箋にすることが大切になるわけですが、そのためには、いったい何をどうしたいのでしょうか。

その答えの一つは「結果よりも過程を大事にする」という考えをもつことではないかと思います。引き続き野球の譬えで恐縮ですが、高めで打たれても根拠のある配球なら仕方ありません。根拠の薄い配球、あるいは低めを狙った球が高めへ行ってしまったといった自分の技術不足に起因する失敗はないようにしなければなりません。

計算どおりにはいかないのは人生も同じです。そもそも「失投というものはない」と腹をくくれば、人生の岐路の選択に当たって、勇氣も沸くでしょう。

そのためには、まず自分の中での準備には怠りがないという覚悟を持つこと。そして大切なのは結果ではなく過程だという考え方をすることです。

2 学期は学校祭、模擬試験、新人戦、コンクール、、、とトライ＆ラーンの日々が続きます。「正解のない」時代と言われるこれからを生き抜くうえでも、結果より過程を大切にする考え方が今こそ必要です。この秋、一日一日の積み上げを期待しています。

受け止める学びから自ら探し求める学びへ —東大生を囲む会—

8 月 19 日、本校を卒業し、現在東京大学で学んでいる山崎諒平さん（12 回生・薬学部薬科学科 4 年）、河谷京香さん（12 回生・文学部哲学科 4 年）、小松花渚さん（13 回生・法学部 3 年）に、在校生希望者を対象に、大学を志望した理由や大学生活について語っていただきました。



受験勉強については、「高 1 の時に解いた過去問がおもしろかったのが志望のきっかけになった」「勉強は受け取るだけでなく、自ら探し求める時が一番楽しいもの」。大学については、「東大は“進振り”（進路の振り分け）という制度があって 1 年半いろ

いる勉強したうえで専門を決められるのがいい」「その分野のトップクラスの教授の話聞けるのがいい」といった話を伺いました。

参加した20数名は、一言も聞き漏らすまいとメモを取りながら熱心に耳を傾けていました。身近なモデルを前に、将来像をクリアーに思い描けたようでした。

高校生平和大使ジュネーブへ飛ぶ ―吉田さん、国連欧州本部訪問―

核兵器廃絶を訴える第27代高校生平和大使の1人である吉田光里さん(2年)はこの夏、県内各地での署名活動や長崎での研修を経て、8月18日から24日の期間、スイス・ジュネーブの国連欧州本部を訪れ、核兵器廃絶を訴えるスピーチを行いました。その一部を抜粋して紹介します。



As one of the last generation to hear directly from the survivors, I call for their stories to be shared. If the survivors believe that their mission is to share their experiences to prevent the use of nuclear weapons in the future, the mission of my generation is to abolish nuclear weapons. We believe that our impacts may be small, but we are not powerless. We pledge to continue our activity in order to realize a peaceful world without nuclear weapons.

高校生平和大使としての大きな仕事の一つを終えた吉田さんは「軍縮会議日本政府代表部主催のレセプションでは各国の外交官の方や大学生の方と交流し、対話の大切さを実感した。核のない平和な世界を願う輪を広げていきたい」と語ってくれました。

まさに「平和」「核廃絶」を深掘りした夏。この夏、皆さんにも深掘りしたキーワードがあったはず。そこをさらに広げると、新しいキーワードが見つかるでしょう。そういう中で味わう一連の心の動きこそが教科の学びのモチベーションになると信じています。

一人で悩まないで ―青春の悩みは勲章です―

青年期は疾風怒濤の時代。心穏やかならぬことはつきものです。でももし皆さんの中に、少し心が疲れた、何か漠然とした不安を感じるという人がいたら、、、



不安な環境から逃げることは決して恥ずかしいことではありません。その思いを誰かにそっと打ち明けてみてください。困っている人は、左のサイトにアクセスしてみてくださいね。

厚生労働省 HP「まもろうよ ころろ」 <https://www.mhlw.go.jp/mamorouyokokoro/>

(閑人閑話) 今年の夏は北部九州総体があり、私自身、例年になく動きをする日が続いた。県外への出張も多く、広島、長崎、東京と立て続けに移動した。▼おかげで懐かしい再会や初めての出会いもあった。移動中に本も読めた。出張先ではご当地ランをするのが何よりの息抜きだった。▼お盆期間には熱中症アラートをかいくぐり、LSD(ロングスローディスタンス)のジョギングや天山登山にも出かけた。おかげで体重も3キロぐらい減った。かえって夏バテ気味かもしれない。▼長崎出張時、早朝、オランダ坂をジョギングした。遠藤周作がここで『沈黙』の着想を得たことを思い出した。遠藤を読もうと思ったのも高校時代ここを訪れたのがきっかけだった。▼キリスト教を邪教とした時代。踏み絵の摩耗したキリストの顔を見つめながら、いったいどういう人の足がこの絵を踏んでいったのかと遠藤は想像を膨らませた。▼遠藤は言う。「『沈黙』では自分である。人間は弱い」。『きれいなもの、美しいものに憧れるのは馬鹿でもできる。弱いもの汚らしいものだからこそ捨ててはいけない』。その後、遠藤の小説にどれだけ励まされたか。▼やる気スイッチはどこにあるか分からない。いろいろな体験を重ねることの意味はそこにもある。この夏皆さんはどんな体験をし、やる気スイッチが入っただろうか。(昌)